

## 生徒が成長を実感できる 英語の指導と評価 実践特集

—新学習指導要領実施目前・臨時増刊号—

課題整理

P.1

生徒が英語学習において成長を実感できるよう、  
指導と評価の一体化を図る

CAN-DOリストを軸に、指導と評価の一体化を図る  
立命館大学 生命科学部生命医科学科 准教授 山下美朋

実践事例 1

P.7

北海道わかかない稚内高校

3年間を見通して作成したCAN-DOリストと、  
思考力を鍛える問いで、アウトプット力を伸ばす

実践事例 2

P.11

石川県立金沢にしきがおか錦丘高校

組織的な指導で英語力の多層化に対応し、  
4技能統合型の活動の充実も図る

実践事例 3

P.15

福岡県立香住かすみがおか丘高校

生徒が成長実感を持てる  
指導と評価を追求し続ける

実践事例 4

P.19

大分県教育庁 高校教育課

エビデンスを基に課題を把握し、  
指導と評価の一体化の実現に向けて全校を支援

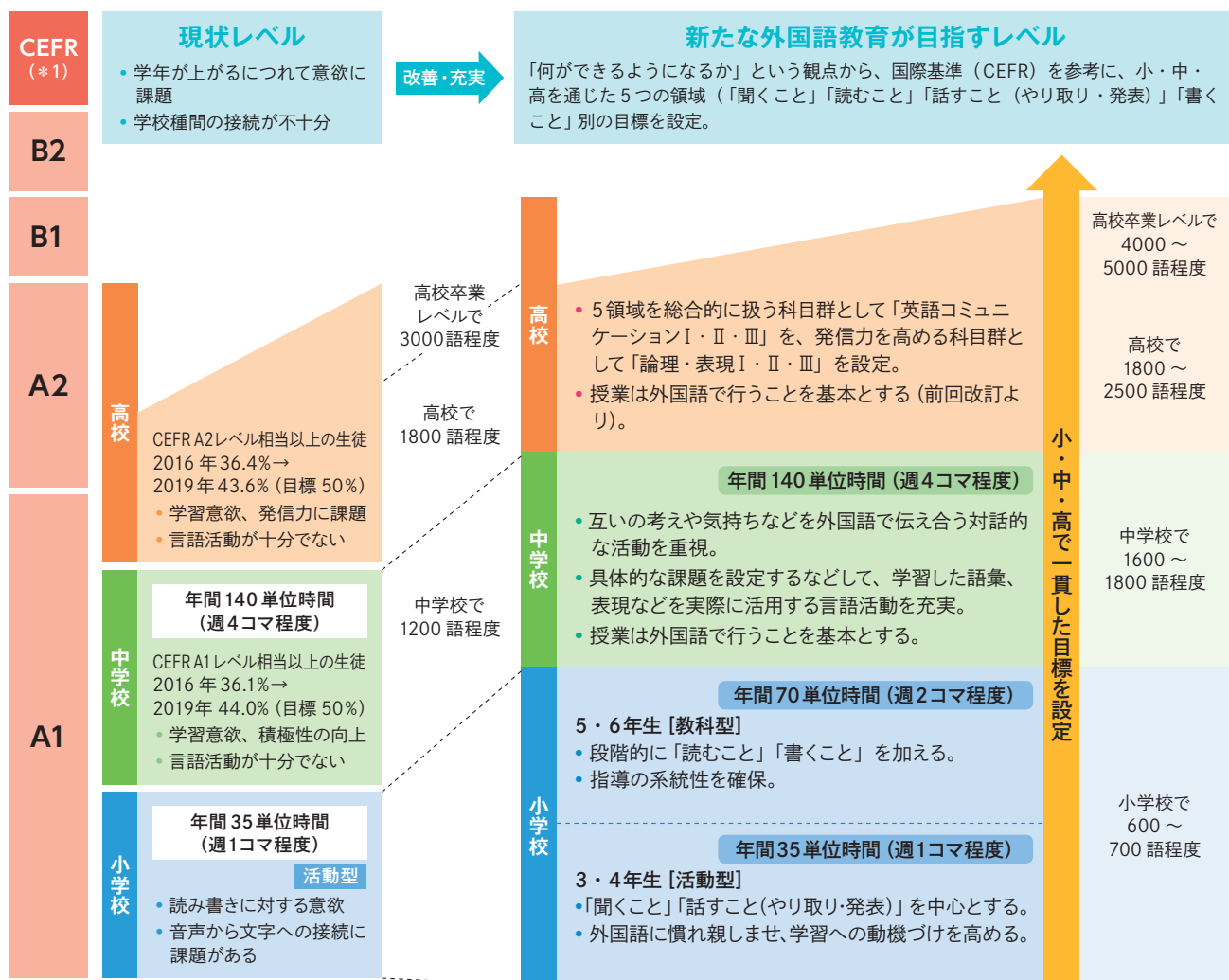
# 生徒が英語学習において成長を実感できるよう、指導と評価の一体化を図る

2022年度から実施される新学習指導要領では、「外国語」は「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の科目構成となり、英語4技能を総合的に扱う言語活動を一層充実させ、生徒の英語による発信力を高める指導がますます求められるようになる。

しかし、文部科学省の調査では、高校での英語の言語活動の実施率は5割程度にとどまっている。

そこで、言語活動の実施に向けた課題を整理するとともに、高校と共同で英語の指導と評価の実践研究を行う大学教員に、課題に取り組む上で必要なことや指導のヒントを語ってもらった。

図1 小・中学校、高校 新学習指導要領における英語教育の内容



※文部科学省「外国語教育の抜本的強化のイメージ」を基に編集部で作成。

\*1 ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages）の略称。語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、包括的な基盤を提供するものとして、2001年に欧州評議会が発表。A（基礎段階の言語使用者）、B（自立した言語使用者）、C（熟達した言語使用者）ごとに2レベル、計6レベルが設定されている。

新学習指導要領のポイント

10年間を見通し、到達目標を5領域別に示す

英語教育の充実・強化は、日本にとって重要な課題であるとして、新学習指導要領の「外国語活動」「外国語」では、教育目標や内容が、小学校・中学校・高校で連続性があるものとなるように見直された。言語能力を客観的に評価するための国際指標であるCEFR（\*1）を参考に、「何ができるようになるか」といった観点から、5領域別に小・中高を通じた目標を設定。児童・生徒一人ひとりがその目標に到達できるように、5領域ごとに学校段階別の到達目標が示された。それは、小学生3年生～高校3年生の10年間のCAN-DOリストと言える。

5領域は、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「やりとり」「書くこと」「発表」「話すこと」「やりとり」が、「話すこと」「やりとり」「話すこと」「発表」に分かれたのが、現行学習指導要領からの大きな変更点だ。

英語力の到達目標は、中学校卒業段階ではCEFRのA1レベル相当

以上、高校卒業段階では必修科目でCEFRのA2レベル相当以上、選択科目で同B2レベル相当以上と設定された。

英語による発信力を育む学習内容を拡充

新学習指導要領の「外国語活動」「外国語」のポイントを見ていく(図1)。

◎小学校(2020年度実施)

3・4年生では、年間35単位の時間の「外国語活動」が導入された。5・6年生では、「外国語活動」は年間70単位の時間の教科「外国語」となり、段階的に「読むこと」「書くこと」が加わる。小学3～6年生の各学年で、年間35単位の時間の英語教育が純増したことになる。

◎中学校(21年度実施)

教科や授業時数に変更はないが、取り扱う語彙数が、小学校で学習する600～700語に加えて、従来の1200語程度から、1600～1800語程度に増加した。また、これまで高校の履修内容だった現在完了進行形や原形不定詞、仮定法などの文法事項が、中学校の履修内容

となった。

◎高校(22年度実施)

高校の「外国語」では科目構成が変わり、5領域を総合的に扱う科目群として「英語コミュニケーションI・II・III」が、発信力を高める科目群として「論理・表現I・II・III」が設定された。取り扱う語彙数は、高校卒業時に4000～5000語程度と、現行学習指導要領での3000語程度から大幅に増える。

「外国語活動」「外国語」の目標を一覧(図2)にまとめた。改めて、アウトプットする力の育成が重視されていることが分かるだろう。

また、目標到達に向けて、指導と評価の一体化を図れるよう、学習評価についても見直された。

新学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の3つの柱に基づいて目標や内容が再整理されたことを踏まえて、観点別学習状況の評価の観

図2 新学習指導要領「外国語活動・外国語の目標」の学校段階別一覧表(抜粋)

■外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。

■「外国語活動・外国語の目標」の学校段階別一覧表(抜粋)

小学校第3学年及び第4学年 外国語活動	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり(*2)育成することを目指す。
小学校第5学年及び第6学年 外国語	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり(*2)育成することを目指す。
中学校 外国語	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり(*2)育成することを目指す。
高校 外国語	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり(*2)育成することを目指す。

\*2 「次のとおり」とは、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」ごとの目標を指す。

※文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編 付録8」を基に編集部で作成。

点が、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理された。「外国語」では、5領域の言語活動が示されているため、観点別学習状況の評

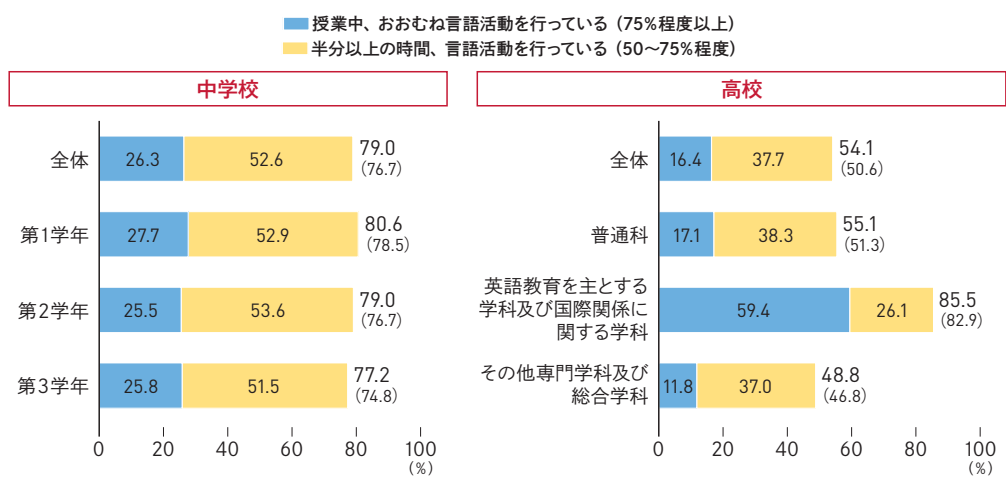
価も、5領域それぞれについて、3観点で評価することになる。指導要録に、各教科・科目の観点別学習状況を記載する欄が新設されることも大きな変更点だ。

パフォーマンステストの  
実施率は、普通科で約37%

ここまで見てきたように、今後、

授業においては英語の言語活動の実践がますます求められるようになる。ただ、文部科学省「令和元年度『英語教育実施状況調査』」の結果を見ると、英語による言語活動の実施

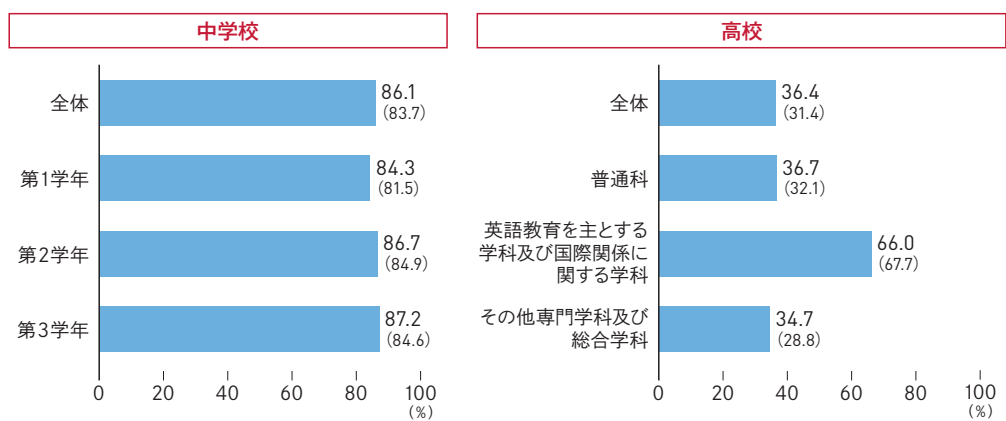
図3 生徒の英語による言語活動の状況 (中学校・高校)



注1) 割合の合計は、小数点第2位切り上げ前の数字を合計して算出しているため、小数点切り上げ後の割合の和と一致しないことがある。

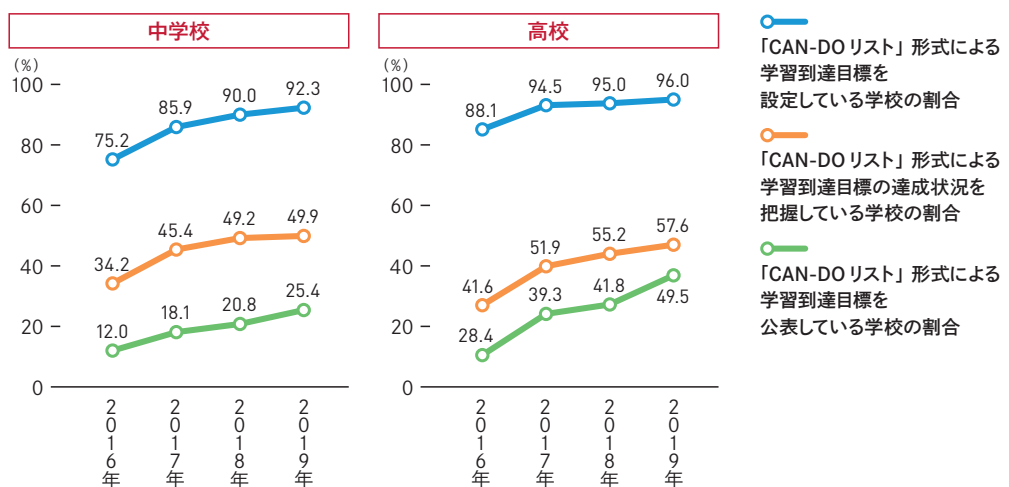
注2) ( ) 内は、2018年度の値。

図4 パフォーマンステストの実施状況 (中学校・高校)



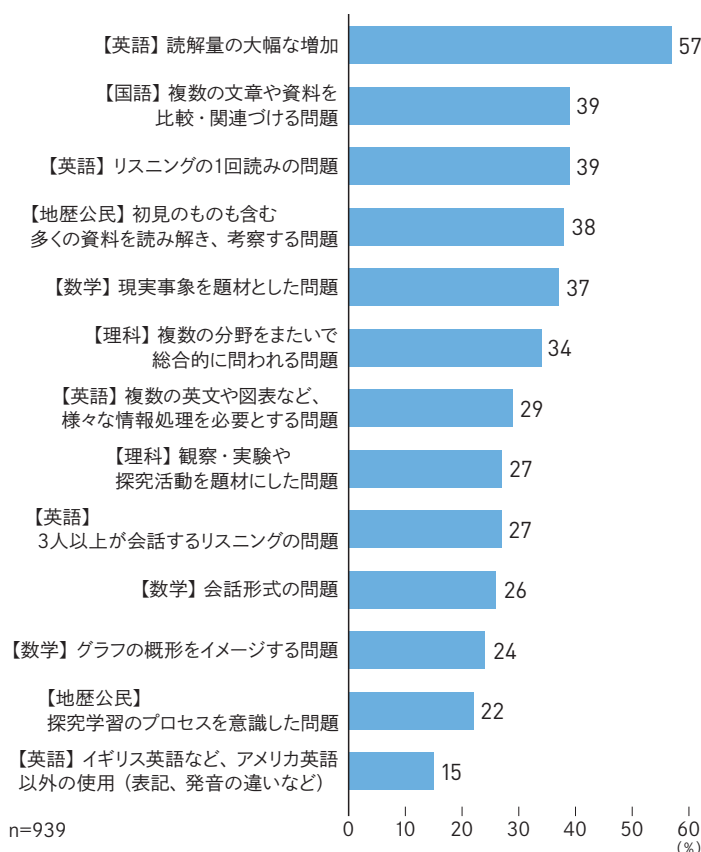
注) ( ) 内は、2018年度の値。

図5 「CAN-DO リスト」形式による学習到達目標の設定状況 (中学校・高校)



※図3～5 文部科学省「令和元年度『英語教育実施状況調査』」を基に編集部で作成。

図6 大学入学共通テストにおいて高校教師が今後の対応が必要だと感じた問題・特徴



※ベネッセ教育情報センター「教育・入試改革対応に関する調査」(2021年9月)を基に編集部で作成。

図7 英語教育の課題 まとめ

課題の種類	シーン	課題の内容
顕在化している課題	授業(指導)	①英語による言語活動の充実
	評価	②パフォーマンステストの実施
		③CAN-DOリストの指導・評価への活用
大学入試	④情報处理的な視点からの読解力の育成	
潜在的な課題	授業(指導)	⑤新課程生の英語力の多層化への対応
	評価	⑥観点別学習状況の評価への対応

※『VIEW next』高校版編集部まとめ。

率は、高校の普通科では約55%、総合学科などでは約49%となっている(図3)。さらに、「話すこと」「書くこと」のパフォーマンステストを両方実施している割合は、高校の普通科では前年度に比べて4・6ポイント上昇したものの、約37%にとどまっている(図4)。

中学校では、言語活動やパフォーマンステストの実施率が約8割であることを考えると、中学校で培ってきた英語による発信力をさらに伸ばすためにも、高校には言語活動やパフォーマンステストの実施率の向上が求められる。

一方で、英語教育が早期化し、学習内容も増加したことから、他教科と同様に、今後、高校に入学してくる生徒の英語力が、さらに多層化する事が予測される。生徒の高校入学時の英語力を把握し、強みや課題に応じた指導が求められるだろう。

英語の学習評価では、CAN-DOリストが用いられているが、その活用状況にも課題が見られる。同じ文部科学省の調査結果では、CAN-DOリスト形式による学習到達目標を設定している高校は9割を超えるものの、その目標に到達したかどうかを把握している割合は約58%だった(図5)。CAN-DOリストの活用が、学習評価においては課題と言えそうだ。

## 大学入学共通テストでは英語の出題に変化が

20年度から実施された大学入学共通テストも、英語の運用能力を問われる出題となった。リーディングでは、複数の資料から必要な情報を読み取って答える問題が目立った。リスニングも、聴き取った内容を基に考える問題が増えるなど、両分野とも、情報量が圧倒的に多く、情報处理的な視点からの読解力が求められる問題だった。大学入学共通テストの実施後、今後の対応が必要だと感じた問題や特徴について高校教師に聞いたところ、英語に関する言及が5項目と最も多く、「読解量の大幅な増加」「複数の英文や図表など、様々な情報処理を必要とする問題」などを挙げている(図6)。

ここまで見てきた高校の英語教育に関する課題を整理すると、図7のようにまとめられるだろう。

次ページでは、高校と共同で英語の指導と評価に関する実践研究を行う大学教員に聞いた、課題に取り組む上でのヒントを、7ページからは、高校や教育委員会の英語教育の実践事例を紹介する。

## CANIDORリストを軸に、 指導と評価の一体化を図る

立命館大学 生命科学部生命医科学科 准教授

山下美朋

やました・みほ

英語による発信力の育成に向けた指導において、何がポイントとなるのか。高校現場と共同でライティングの指導と評価の実践研究に取り組む立命館大学の山下美朋准教授に聞いた。

### 実践事例に数多く触れ、 言語活動のイメージを持つ

これまでは、英語4技能の育成が重要であることを認識していても、生徒の希望進路の実現のために大学入試への対応が優先され、言語活動は後回しになりやすいといった状況があったかと思えます。しかし、2021年度大学入学共通テストで実用的な英語力が求められたように、各大学の入試においても、英語4技能をバランスよく評価するようになっていくと考えられます。さらに、社会のグローバル化が進み、仕事でも日常生活でも英語を使う場面

が増える中で、使える英語力を育むことは、学校教育の重要な役割の1つと言えると思います。

私は高校の先生方と共同で英語指導の研究に取り組んでいますが、その経験から、授業に言語活動を取り入れるためには2つのポイントがあると考えています。

1つは、先生方が英語の言語活動の実践事例にたくさん触れて、どのような指導が必要なのかを具体的にイメージできるようにすることです。例えば、教員研修は、参加者が言語活動を体験するワークショップ形式にし、明日の授業から使える実践的な内容にするといった工夫が挙

◎関西大学外国語教育学研究科外国語教育(英語)博士課程修了。博士(外国語教育学)。専門分野は、英文ライティング、対照修辞学研究、コーパス分析。2019年度から現職。高校と連携し、ライティングを中心とした言語活動の指導と評価の研究に取り組む。



げられます。先進校の視察や教師間の情報交換、インターネット上の授業動画の活用も有効だと思います。

### 生徒が関心を持てる題材で 生徒主体の言語活動に

もう1つは、生徒が能動的に言語活動に取り組む意欲を持てるようにすることです。生徒にとって英語学習の動機づけとなるのは、大学入試だけではありません。授業で自分と話したり書いたりした英語が相手に伝わっているのが分かると、生徒は達成感を得ることができ、その後の活動に意欲的になるようです。

生徒主体の言語活動とするためには、生徒が英語を話したくなる、英文を書きたくなる題材を選ぶことが重要です。それはすなわち、生徒が友人との会話で取り上げそうな話題や、今日的な社会課題など、日常生活や仕事で英語を使う場面を想定した題材を選ぶということです。英文の記事や英語のニュース動画など、題材はインターネットにあふれていますし、そうしたリアルな題材の方が、生徒の好奇心をより喚起できるのではないのでしょうか。

言語活動の時間を確保することが難しい場合は、短時間でできる活動から始めるとよいと思います。また、生徒の英語力に合わせた活動から始め、段階的に難易度を上げていくことも大切です。そうして少しずつ言語活動を積み上げていき、それまでの成果を発揮する機会として、年に1度は、デイベートやポスター発表など、4技能を統合的に使う場を設けるとよいでしょう(図)。

短時間でもその場限りの活動とされないよう、目標を設定し、その達成に向けて、3年間を見通した指導計画を立てることが重要です。また、大学入学共通テストでも求められて

図 4技能統合型の活動例

- ◎日本語で話した自分の考えや昨日の出来事などを、知っている英語で話したり書いたりする。教師は、机間指導を通じて、生徒が用いた表現の中からよいものをピックアップし、ほかの生徒に共有する。
- ◎「友人とけんかをした」「SNS のアカウントが漏れた」など、相談室に寄せられた悩みに答えるという設定で、最初は口頭で英語で答え、その内容を英文のメールに書く。
- ◎教科書の素材文をテーマに個々が英語でスピーチをし、定期考査ではその内容を書く問題を出す。「話す」「書く」を授業と連動して評価する。
- ◎まず、口頭で与えられたテーマに関する自分の意見を英語で述べる。次に、同じ活動をした後、ワンパラグラフエッセーを書く。そして、エッセーのセンテンスを増やすといった具合に、活動をレベルアップさせていく。
- ◎コロナ禍における課題について、英字新聞の記事や英語のニュース動画を見て、自分たちに何ができるのかを考える。グループ内で資料を分担し、各自が資料から理解したことを英語で報告し合い、英語の意見文を書く。
- ◎「高校生が使う SNS の是非」などのトピックを出し、1回 25 分間の活動を 3 回行う。1 回目は、グループで英語でディスカッションをして、自分の考えを持てるようにする。2 回目は、それをトピックセンテンス、サポートセンテンスの英文で書く。3 回目は、2 回目に書いた英文を生徒同士で相互評価する。
- ◎自分が関心のあるテーマで調べ学習をし、それらを英文のレポートやポスターにまとめ、口頭でも英語で発表する。与えられた題材ではなく、自律的に情報を得る態度を育成する活動にもなる。

※山下准教授の取材を基に編集部で作成。

CAN-DO リストは、生徒にとって分かりやすい評価規準

英語の指導計画の立案に有効なのが、CAN-DO リストです。教師間で目標の目線合わせができれば、その達成に向けてどのように指導す

ればよいか、具体的に議論することができますし、その過程では、到達度を測るために評価も組み込まれていくでしょう。CAN-DO リストがあることで、指導と評価の一体化がしやすくなるのです。

CAN-DO リストで用いられる「〜できる」という表現は、生徒にとっても分かりやすい評価規準です。過去の自分の英語力と照らし合わせて、成長を実感することができ、目標の設定もしやすいのが、CAN

D-O リストの特長だと思えます。

授業での活動を評価することは、生徒が成長実感を持つ機会として重要ですが、パフォーマンステストの実施率が低いのは、評価方法に難しさを感じているからだと思えます。

例えば、スピーキングでは、単語や文法の知識に加え、流暢さや論理性など、評価対象にできる項目が多岐にわたります。加えて、観点別学習状況の評価は公正さが求められるため、各観点をどの活動で評価するのかが決め、ルーブリックを作成する必要があります。

ルーブリックは、複数の教師でパフォーマンステストを実施し、その評価結果をすり合わせる中で作成するのがよいと思います。

そうした工程も含め、評価には労力がかかります。すべての活動を評価しようと思わず、まずは教師間で評価の対象とする活動を決め、評価の実績を積み上げていくことが大切ではないかと考えています。

目的に応じた評価方法で、生徒に成長実感を持たせる

英語の資格・検定試験は、活用したい評価方法の 1 つです。アセスメ

ントとしての信頼性が検証され、文部科学省が英語学習の指標として示した CEF R との対照表が出されている試験であれば、国際基準での英語力を測ることができます。教科書の素材から出題する定期考査やパフォーマンステストは、日頃の指導の評価や、特定期間の成長の測定に適しています。一方、英語の資格・検定試験は、英語力の長期的な伸びを測り、指導の効果検証や生徒の成長実感を持たせるために役立ちます。

私が所属する生命科学部では、3 年生で研究室に所属し、先行研究として大量の英語論文を読み、研究成果をまとめる論文を書きます。アジアからの留学生も多く、研究室は小さな国際社会です。また、海外の研究者との共同研究に、学部生が参加することも珍しくありません。研究活動に向けて、1 年次から、英語の科目でパラグラフライティングを徹底的に指導しています。英語が使えると、学生の将来の可能性は確実に広がります。そうした、大学での英語の学びの状況を高校生に伝えていくことで、英語に対する学習意欲の向上に結びつけられればと思っています。

# 3年間を見通して作成したCAN-IDOリストと、思考力を鍛える問いで、アウトプット力を伸ばす

北海道稚内高校は、スピーキングやライティングにおけるアウトプット力を伸ばすため、指導と評価の改善を推進している。3年間を通して身につけさせたい英語力を明確にし、英語科として統一した取り組みができるよう、シラバスや教材を作成。答えが1つではない問いを通して、生徒が間違いを恐れずにアウトプットできるようにするなど、言語活動の充実を図っている。

## 取り組みの背景

### 生徒が意欲的に英語を話せる授業づくりが課題

2023年度に創立100周年を迎える北海道稚内高校は、稚内市唯一の公立高校で、地域の生徒を幅広く受け入れている。英語教育においては、入学生の英語力の多層化が課題であり、英語の資格・検定試験の結果を見ると、1年生の「GTEC」のスコアは、100点台後半〜800点台後半と幅広い。

加えて、どの学力層の生徒も、スピーキングやライティングにおけるアウトプット力に課題が見られた。進路指導部長の山本龍りゅう先生は、自

校の課題を次のように捉えている。

「特に課題が顕著だったのは、スピーキングです。生徒は間違えることを恐れて、積極的に発言できていないように見受けられました。過去の授業は、教科書の内容理解が中心で、本文の内容の正誤について考える活動が多かったからかもしれません。ペアで行う活動も、定型文の反復練習が多く、アウトプット活動に課題がありました。英語の授業でも、予測不能な社会で求められる思考力などを育む必要があると考え、授業改善に取り組むことにしました」

18年度、国立教育政策研究所の教育課程研究指定校事業の指定を受け、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ

Ⅲ」において、生徒同士の言語活動を通して思考力・判断力・表現力等を育成する指導や評価の改善についての研究を始めた。

「授業は教師個々の裁量に任せられており、英語科として統一した取り組みとなっていないのでした。そこで、当時の研究主任を中心に、3年間を見通した指導や評価の確立と、授業での言語活動の充実を目指しました」（山本先生）

## CAN-IDOリストの作成

### 3年間を見通したCAN-IDOリストやシラバスを作成

まず取り組んだのが、CAN-IDO


ORリストの作成だ。新学習指導要領を踏まえ、卒業までに身につけさせたい英語力を4技能5領域ごとに設定。それから逆算して、各学年での到達目標を作成していった。そして、国立教育政策研究所の調査官や北海道教育委員会の指導主事からもアドバイスを受け、CAN-IDOリストを完成させた（図1）。

そのCAN-IDOリストを反映させる形で、各学年のシラバスを作成。シラバスには、CAN-IDOリストで示した各領域の能力を育成できるよう、単元ごとに育成したい力を設定。評価規準や方法も定め、統一の取り組みになるようにした。

また、18年度から年次進行で、各

学年共通で使用する教材の開発を進めていった。

「CAN-DOリストやシラバス、教材は、毎年、英語科内で見直しています。入学してくる生徒が抱える課題は、その年によって変わるからです。また、教材には旬なトピックも加えるなど、生徒が興味を持てるような工夫をしています」(山本先生)



**山本龍**  
進路指導部長  
やまもと・りゅう  
教職歴11年。同校に赴任して8年目。英語科。



**中村和徳**  
教務部・英語科主任  
なかむら・かずのり  
教職歴3年。同校に赴任して3年目。



**川田亮**  
1学年担任  
かわた・りょう  
教職歴6年。同校に赴任して2年目。進路指導部。英語科。

**学校概要**  
設立 1923 (大正12) 年  
形態 全日制、定時制/普通科、商業科、衛生看護科/共学  
生徒数 1学年約160人  
**2021年度入試合格実績 (現浪計)** 国公立大は、小樽商科大、北海道大、高知大、釧路公立大、札幌市立大などに17人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、青山学院大、関西外国語大などに延べ85人が合格。

言語活動の充実

**答えが1つではない問いを設定し、生徒の発話を促す**

具体的な指導上の工夫を見ていく。同校が最も注力しているのが、生徒の思考力・判断力・表現力などを鍛え、自ら発信したくなるような言語活動の設定だ。山本先生は次のように語る。

「間違いを恐れて発言できないのであれば、答えが1つではない問いにすれば、生徒は思ったことを自由に語る。」

に発言できるのではないかと考えました」

「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」で、そうした問いを盛り込んだ各学年共通の仕様のプリントを作成し、授業で活用した。例えば、1年次の「コミュニケーション英語Ⅰ」では、自転車通勤の長所と短所をそれぞれ考え、自分なら自転車通勤をしたいかどうか、理由とともに述べるという課題を出した(P.9図2)。「テーマを多角的に捉えてほしい」と思い、長所・短所、賛成・反対な

ど、様々な視点・立場で自分の考えを述べるような課題にしています。主体的に考えられる余地のある問いを用意することで、単語や文法が多少間違っても、生徒は互いの発言を認め合うことができるようになり、間違いを恐れずに発言するようになりました」(山本先生)

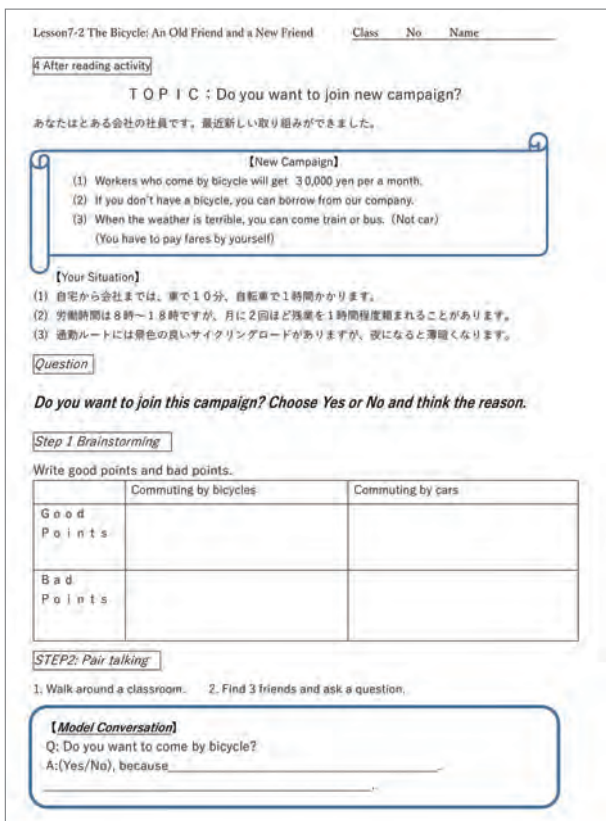
自分の考えをライティングする課題も出した。例えば、パンダの生態をテーマとする単元では、野生動物を守るためにはどうしたらよいのか、50〜70語程度で自分の考えを表

図1 北海道稚内高校普通科 CAN-DO リスト(抜粋)

1年次終了時	
知識・理解・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違いを恐れず、積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる。</li> <li>教科書等の内容に触れ、自国や異文化への関心を高めることができる。</li> <li>リズムやイントネーションなど、英語の音声的な特徴に注意して聞いたり話したりすることができる。</li> <li>中学校卒業レベルの語彙を活用ことができ、高校入門レベルの語彙を理解することができる。</li> <li>基礎的な英文法を理解し、活用することができる。</li> </ul>
Reading	テキストレベルの文章において； <ul style="list-style-type: none"> <li>キーワード等に着目し、文章の展開や概要・要点をおおまかに把握することができる。</li> <li>書き手の意見や話の詳細等に関する単純な質問に答えることができる。</li> <li>必要な情報について、話の内容を推測しながら読み取ることができる。</li> </ul> 【目標 WPM：70～90】
Listening	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校卒業レベルの基本的な語句を聞き取り、話の展開や概要・要点をおおまかに把握することができる。</li> <li>話し手の意見や話の詳細等に関する単純な質問に答えることができる。</li> <li>必要な情報について、話の内容を推測しながら聞き取ることができる。</li> </ul>
Writing	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について、自身の考えや気持ちを述べる文章を書くことができる。</li> <li>社会的な話題について、自身の考えや気持ちを述べる文章を書くことができる。</li> <li>導入、展開、まとめの構成を意識して文章を書くことができる。</li> </ul> 【語数の目安：50語～70語】
Speaking Interaction	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について簡単な質問に答えたり、自身の考えや気持ちについて話し合ったりすることができる。</li> <li>社会的な話題について簡単な質問に答えたり、自身の考えや気持ちについて話し合ったりすることができる。</li> </ul>
Speaking Presentation	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な話題について自身の考えや気持ちを発表することができる。</li> <li>社会的な話題について自身の考えや気持ちを発表することができる。</li> </ul> 【発表時間の目安：1～2分】
外部試験他	【英検：3級～準2級】 【GTEC：350～420】 【CEFR：A1～A2】

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 1年次「コミュニケーション英語I」の授業プリント



※学校資料を抜粋して掲載。

現する英文を作成させた。

そうした思考力・判断力・表現力等を鍛えるアウトプット活動は、スピーキングやライティングの活動に適した単元に絞って実施している。そうするようになったのは、山本先生が青森県立田名部高校の実践事例を教育雑誌などで知ったのがきっかけだった。

「それまで各単元で4技能5領域を育成しなければならぬと思っていました。しかし、田名部高校では、アウトプット力を鍛える活動を精選していると知り、目から鱗が落ちま

した」(山本先生)

田名部高校の実践を参考に、アウトプット活動を丁寧に行う単元と、インプットを強化する単元に分けて授業計画を作成し直した。アウトプット活動に適した単元では、教科書の内容を発展させたテーマで、生徒が主体的に自分の考えをまとめるライティングやスピーキングの課題、または10分間のデイベートに取り組ませ、パフォーマンステストも実施している。

一方、インプット活動に適した単元では、教科書の内容理解や文法解

説の後、教科書本文の英文を聞き、

それを書くディクテーションやリプロダクションに取り組ませている。「本校は学力が多層化しているため、ディクテーションなどのインプット用教材は、ハード、ノーマルと、2つのレベルを用意し、習熟度に合わせたスキルアップを目指しています」(山本先生)

**情報処理的視点からの読解力の育成**

複数の資料から必要な情報を読み取り、整理する力を鍛える

大学入学共通テストに対応するべく、授業プリントの内容も改善しているという。例えば、山本先生は、教科書の各段落にふさわしい見出しを選ばせる問題を授業プリントで出している。

また、複数の資料を読み、必要な情報を整理・統合して答える問題に対応するため、公務員試験の判断推理のような問題を英文にした問題を、1年次で取り入れている。1学年担任の川田亮先生は次のように話す。

「生徒に、新聞やインターネットから気になる記事を日本語・英語問

わず集めてもらい、それらを題材にして、グループで1つの意見を英文にしてまとめる活動にも挑戦しています。各学年で活動を工夫するとともに、系統立てた取り組みとするためにはどうしたらよいか、英語科内で議論しています」

**学習評価の工夫**

生徒に達成感を持たせ、自信を高める評価を目指す

CAN-DOリストの作成を機に、評価方法も見直した。それまで「コミュニケーション英語I・II・III」は、定期考査7割・平常点3割の比率として評定をつけていた。それを改め、定期考査や日々の見取りでは、「関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」、「知識・理解」の4観点を評価することにした。

「授業で行っている言語活動をきちんと評価の対象に組み入れ、指導と評価の一体化を図れば、生徒は評価に納得感を持ち、活動にも意欲的に取り組むようになるのではないかと考えました」(山本先生)

例えば、定期考査では、教科書本

図3 1年次のパフォーマンステストで使用するルーブリック

自由英作文 (10点程度)		
評価基準 (合計10点)		
語数	50語以上	5点
	40~49語	4点
	30~39語	3点
	20~29語	2点
	10~19語	1点
	10語未満	0点
構成	序論・本論・結論の構成で書かれており、本論には理由が2つ以上書かれている。	2点
	序論・本論・結論の構成で書かれているが、本論には理由が1つしか書かれていない。	1点
	序論・本論・結論の構成で書かれていない。	0点
正確さ	満点は書いた語数によって異なる。そこから文法・時刻ミス1が所につき、-1点	
	40語以上...3点満点スタート	
	30~39語...2点満点スタート	
	20~29語...1点満点スタート	
	20語未満...0点	

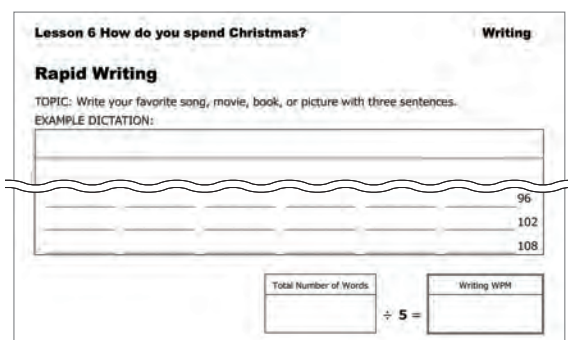
※学校資料をそのまま掲載。

文の内容からの出題は「知識・理解」を、初見の英文を見てライティングする問題は「外国語表現の能力」を評価している。

また、18年度から、生徒のアウトプット力の伸びに加え、思考力や表現力を測るため、答えが1つではない問いを踏まえたライティングとスピーキングのパフォーマンステストを年3〜4回実施。いずれのテストも、事前に生徒にルーブリックを提示している(図3)。

「ライティングでは、50語以上書く」と5点加点とするなど、評価基準を明確にすることにより、生徒に

図4 1年次のラピッドライティングの教材



※学校資料を抜粋して掲載。

とつても目指す目標が分かりやすくなったことで、意欲的に書いてくれる生徒が増えました」(川田先生)

**資格・検定試験の結果で授業改善の成果を測る**

スピーキングやライティングの力は、英語の資格・検定試験を実施し、客観的な指標でも評価している。英語科主任の中村和徳先生は次のように述べる。

「毎年7月に、全学年で『GTEC』を受検しています。スコアで評価されることで、生徒は英語力の伸びを

実感でき、目標も立てやすくなっています」

21年度の2年生のライティングのスコアは、前年度の2年生のスコアよりも、20点以上上昇した。1年生の授業で、ラピッドライティング(図4)を取り入れた成果が出ていると、山本先生は分析する。

「1年生の授業では、『自分の好きな映画や音楽とその理由』など、あるトピックについて、5分間でできるだけ多くの英文を書く活動を、各単元で1回ずつ行いました。単語や文法の間違いを恐れずに、自分の考えを素早く書く力を鍛えたいと考え、試験的に取り入れたのですが、期待以上の成果を出すことができました。『GTEC』の結果から、授業改善の方向性が間違っていないことを確認できました」

**成果と展望**

**今後の改善のキーワードは 様々な連携**

指導と評価の改善に取り組んだ結果、生徒の英語力は着実に伸びているが、課題もある。1つは、4観点から3観点に変わる観点別学習

状況の評価の実施だ。現在、英語科内で検討している。

小中高連携も課題の1つだ。現在、市内の小学校・中学校・高校が連携し、12年間を見通したCAN-DOリストの作成を進めている。互いの授業見学も行っており、今後連携を深めていく予定だ。

「GIGAスクール構想の推進によってICTを活用した授業に慣れ親しんだ生徒が、次年度から高校に入学してきます。英語科でも小・中学校と連携し、ICTを活用した授業を模索していきます」(川田先生)

さらに、ALTの活用も課題だ。授業の補助的な役割を果たすだけでなく、今後は授業づくりにもかかわってもらい、より実践的で、生徒が主体的に英語を使いたくなる言語活動に進化させていきたいと考えている。

「看護科の『英語会話』の授業では、欧米の若者がよく使うフレーズなど、生徒が関心を持ちそうなトピックをALTが織り交ぜた授業を展開しています。『コミュニケーション英語』でも、ALTと連携し、より実践的な英語力が身につく授業づくりを目指していきます」(中村先生)

## 組織的な指導で英語力の多層化に対応し、 4技能統合型の活動の充実も図る

併設型中高一貫教育校の石川県立金沢錦丘高校は、併設の中学校から入学する生徒と、高校から入学する生徒が混在するため、英語力や学習意欲が多層化しやすい状況にある。そこで、学年ごとに生徒の実態や課題を教師間で共有し、組織的な指導体制を構築。4技能統合型の言語活動を充実させ、パフォーマンステストも実施するなど、生徒が英語を使う場を数多く設けている。

### 組織的な指導体制

生徒の状態に合わせて学年ごとに指導を柔軟に変える体制に

地域の進学校である石川県立金沢錦丘高校は、2004年度に県立中学校を併設し、県内で唯一の公立の併設型中高一貫教育校となった。同年、文部科学省の研究開発校に指定されたことを機に、英語科では、英語4技能をバランスよく育成するため、6年間での系統立てた指導を行ってきた。堀義明校長は、指導方針を次のように語る。

「本校が目指す英語教育は、生徒が『なりたい自分』になるための学びです。生徒は、英語を学ぶ中で世

界に目が向くようになり、自国のよさや課題に気づきます。そして、英語を使って『なりたい自分』を描き、夢を追いかけることで、大きく成長していきます。生徒の将来を見据えてその成長を支える中で、結果的に難関大学の入試にも対応できる英語力が育まれると捉えています」

英語科では、6年間を見通したシラバスや学年共通の教材を作成し、各学年で組織的な指導ができるようにしている。その背景には、1年次の英語力や英語に対する意識の個人差が大きいことがある。

同校では、1つの学年に、併設中学校から内部進学をする生徒（以下、内進生）のクラスが3クラス、

高校から入学する生徒（以下、外進生）のクラスが5クラスある。併設中学校の英語の授業では言語活動に力を入れていることから、内進生は、英語を書いたり、話したりすることへの意欲が高い。ただ、英語の正確性には課題が見られ、加えて、英語への関心の度合いに応じて英語力が一極化する傾向があった。一方、外進生は、単語や文法の知識は一定のレベルを備えているが、英語運用の技能や意欲については個人差が大きかった。また、学年によってもその幅やレベルは異なっていた。

「生徒の英語力を分析すると、内進生は習熟速度が速い層と遅い層に分かれ、外進生の多くは中間層に

るといった状況でした。そのため、どの層を中心に授業を行えばよいか、その判断が難しく、学年によって指導を柔軟に変える必要もありました。そこで、学年内で指導の方針や内容の目線合わせをしっかりと行い、指導を進める体制が構築されてきたのです」（堀校長）

### 1年間の学習の見通しを 持たせ、目標意識を高める

教師間で指導の方針や内容を共有するためのツールがシラバスだ。毎年、英語科で指導の実績や課題を基に意見交換をして改訂し、生徒にも配布している。シラバスには、年間

の単元計画や定期考査の出題範囲などのほかに、CANIDORリストも掲載。4技能5領域の到達目標を具体的に示している(図1)。

CANIDORリストの活用の仕方は、個々の教師に委ねられている。例えば、英語科で1学年主任の宮下香先生は、速読の活動で、CANIDORリストのWPM(\*1)を示してから取り組ませるなど、生徒の目標



校長  
**堀 義明**  
ほり・よしあき  
教職歴36年。同校に赴任して7年目。



1学年主任  
**宮下 香**  
みやした・かおり  
教職歴23年。同校に赴任して2年目。英語科。



2学年副主任  
**鈴木武秀****鈴 木 武 秀**  
すずき・たけひで  
教職歴22年。同校に赴任して6年目。英語科。

学校概要

設立 1963(昭和38)年  
形態 全日制/普通科/共学  
生徒数 1学年約320人  
2021年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、筑波大、お茶の水女子大、東京大、富山大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに148人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、法政大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ790人が合格。

図1 1年次 4技能5領域の到達目標

育てたい生徒像	英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけ、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を有し、生涯にわたって英語を学び続ける。
到達目標	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとし、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を身につけている。
Listening	事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。
	1分間80~100語レベルの日常的話題に関する対話などを聞き、概要や要点を捉えることができる。
Reading	説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。聞き手に伝わるように音読することができる。
	使用テキストレベルの英文を90WPM程度で読んで、概要や要点を理解することができる。
Speaking	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりすることができる。
	<interaction> ①日常的話題について、自分の意見を、理由を添えてパートナーと1分程度やりとりすることができる。②相手の意見に対して、相づちを打ったり、聞き返しをしたりすることができる。
Writing	<production> 日常的話題について、自分の意見を、理由を添えて1分程度話すことができる。
	聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書くことができる。 自分の意見やその理由を15分で60語程度の英語で書くことができる。

※学校資料を基に編集部で作成。

意識を高めることに活用している。「『この目標を達成するために、この活動を行ってみましょうか』などと、教師間で指導について具体的に話し合い、共通理解を図って指導にあたっています」(宮下先生)

生徒の実態や課題を共有し、指導内容をすり合わせるために、学年ごとの教科会を週1回行うほか、教師間の日常的なコミュニケーションも大切にしている。英語科で2学年副

主任の鈴木武秀先生は、職員室での日々の会話が、指導改善につながることも多いと話す。「2年生は、模擬試験や英語の資格・検定試験の結果から、リスニングが課題であることが明らかになり、担当教師が話し合っってシャドーイングを充実させるなど、対策を講じました。また、同じ単元の授業を先に終えた教師から、生徒の様子を聞き、自身の授業で指導を工夫した

言語活動の充実

り、定期考査の問題を考査実施の数週間前から検討し合ったりしています。指導と評価の両面で、常に教師間で綿密に打ち合わせをし、授業の質の標準化を図っています」

身近な話題から社会問題まで 現実の題材で言語活動を行う

授業で重視しているのは、英語4技能による言語活動の充実だ。

「相手の発言を踏まえて自分の考えを論理的に話したり、多様なデジタル機器を活用して思いや意見を発信したりと、広い意味での英語力の育成を図っています。生徒個々の英語力によって異なりますが、到達目標は、2年次はCEFRのA2~B1、3年次はB1以上としています」(鈴木先生)

言語活動を重視する方針が表れているのが、各学年で週1時間実施する学校設定科目「LC探究」(\*2)だ。授業は、英語科教師とALTのチーム・ティーチングで行い、英語による論理的・批判的思考力の育成を目指して、グループワークやディスカッション、プレゼンテーション、

\*1 Words Per Minuteの略。1分間あたりに読める単語数のこと。 \*2 LCは、Logical Communicationの略。1年次は「LC探究」、2・3年次は「LC発展」として設定。

図2 1年次「LC探究」の指導案(抜粋)

**OBJECTIVES** : To get the students to compare and choose a B&B they would like to stay at in New York.

**MATERIALS** : PC, Worksheet

PROCEDURE	TIME (MIN.)	ACTIVITIES		NOTES
		JTE & ALT	STUDENTS	
Activity 1 Mini Chat	5	Get the students to use the mini chat sheet with their new "paper partner". The Topic: "If you went on vacation, would you stay in the city or the countryside?"	Students speak to their paper partners and answer the topic question.	Mini Chat Sheet, Paper partner
Activity 2 Sawanoya & Through the Grapevine	10	Get students to watch 2 videos. One of Sawanoya from last week, one of an American B&B. Go over the T/F answers.	Watch the videos and answer the T/F questions.	Worksheet
Activity 3 Show Pictures, Reading	15	The ALT shows pictures of each B&B. Instruct the students to skim 4 travel writings, then read 1 more closely.	Students read the travel writing. Then they choose one B&B they like most and in more detail.	Dictionary, Worksheet, B&B Listings Worksheet
Activity 4 Writing	15	Students write about the following topic: <i>Imagine you are going to America. Which bed and breakfast do you stay at and why? What do you do there?</i>	Dictionary is allowed.	Dictionary, Worksheet

上図は、1時間分の指導案。

※学校資料を基に編集部で作成。

ライティングといった4技能統合型の活動を主体に展開している。

「本科目では、生徒が生活や仕事で活用できる英語力の育成を目指しています。そこで、英語を実際に使う場面を想定し、題材は、生徒にとって身近な話題から社会問題まで、幅広く扱っています」(宮下先生)

例えば、「旅行」の単元では、毎時間、ミニチャットから始め、日本とアメリカの旅行に関する記事や動画を見た後、正誤問題などに取り組

み、内容を理解した上で、題材に関連したテーマで英作文を書く(図2)。

そうした活動を毎時間積み重ね、単元の最後の授業に、旅行に行つたつもりで自分の体験をスピーチするといった展開にしている。

#### デジタル機器を活用し、4技能統合型の活動を展開

「英語表現」や「コミュニケーション英語」の授業でも、各技能を育成

する言語活動を展開している。

「聞き取った英文を踏まえた意見をペアで英語で伝え合うなど、『聞く、読む、話す、書く』のそれぞれの活動がスムーズにつながるようになっています。そうすると、例えばリスニングが苦手でも、ライティングを通じて題材への理解が深まるなど、各技能が補い合う形で英語力が高まることが期待できます。また、1時間の中で様々な活動を行うと、授業にメリハリが付き、生徒の集中力が持続しやすいことも利点です」(鈴木先生)

現在は、コロナ禍の影響で生徒同士の対面での活動が行いにくいいため、1人1台配布されているノートパソコンを活用した活動を行っている。例えば、グループごとに「Google Jamboard」(※3)の作業スペースを設け、そこにグループのメンバーが意見を入力し、グループ内で意見を共有。そうして考えを深めた上で、生徒個々が英文を作成し、それを「Google Classroom」(※4)で提出させるという活動を行った。

「デジタル機器を使ってもスムーズに意見交換ができていました。生徒にとっては、デジタルスキルの向

上につながり、教師にとっては、場所を選ばずに添削が行えるというメリットがあります」(鈴木先生)

#### 英語力が多層化への対応

#### 習熟度別の少人数授業を実施 課題提示やペア活動も工夫

2・3年次の「英語表現」は、定期考査の結果を基にクラスを2分割し、生徒の英語力に応じた少人数授業を行っている。教師も、それぞれに授業を工夫している。宮下先生は、難易度の異なる複数の課題を提示し、生徒が自分の英語力に合った課題に取り組めるようにしている。

「授業で各自がしっかりと力を伸ばせることに留意しています。複数の課題を提示することで、『もっと難しい課題に取り組みたい』といった学習意欲を引き出すねらいもあります」(宮下先生)

鈴木先生は、生徒のペアの作り方に配慮していると語る。

「英語力が多層化しているので、ペアワークが効果的なものになるよう、工夫しています。具体的には、英語力の差が小さい生徒同士を組み合わせるようにしています。生徒からは、

\*3 電子ホワイトボードの機能を持つクラウドのアプリケーション。

\*4 教師が出す課題の管理をサポートするツールで、課題の配信と採点、フィードバックの提供などの機能がある。

『友人から教えられて理解が進んだ』『自信がなかったけれど、頑張った教えた』といった前向きな声が上がっています」

### パフォーマンステストの工夫

## 達成感を持たせ、自信を高める手段としても重視

学習評価では、パフォーマンステストを実施している(図3)。生徒には、テスト前にルーブリックを提示し、目標を具体的にイメージさせることで、パフォーマンスの向上を促している。

学期に1回実施するスピーキングやプレゼンテーションのパフォーマンステストは、以前は、情報室のパソコンでヘッドセットを使って録音していた。しかし、コロナ禍の影響でヘッドセットの共有ができないため、現在は、生徒が各自所有するスマートフォンに録音させ、その音声ファイルを「Google Classroom」を用いて提出させている。

「提出した音声ファイルは、自身のスマートフォンに蓄積されるため、生徒は過去の音声を聞くことで、成長を実感できます」(鈴木先生)

図3 1年次 パフォーマンステスト(例)

- ①音読テスト 課題文の音読。  
題材 テクノロジーと生活についての未来予測。
- ②リテリング キーワードを用いながら、課題文の内容を自分の言葉で再現する。準備時間1分間。解答時間1分間。  
題材 デパートで売られていたライオンの赤ちゃんを購入する決意をするまでの説明。
- ③英作文 指定のトピックについて、意見・理由・サポートセンテンス・結論を、50語以上で書く。  
題材 自分が動物だとしたら、動物園の生活と野生の生活、どちらが好きか。

※学校資料を基に編集部で作成。

ライティングについては、「英語表現」「コミュニケーション英語」「L C探究」のいずれにおいても、英文の添削指導に力を入れている。

「ライティングの技能の向上は、スピーキングやリーディング、リスニングの技能の向上にもつながるので、教科書に載っている課題文の要約や英文など、ライティングの課題に取り組みせています。書いた英文は形として残るので、『英文をたくさん書けるようになった』『先生に修正される箇所が減った』『先生からよいコメントをもらえた』などと、過去の自分と比べて、自身の成

長を実感させるねらいもあります」(鈴木先生)

1・2年次は、7月と12月の年2回、「GTEC」を受検。その結果に基づき、教師は、授業の成果や課題を分析して指導改善を図っている。生徒にとっては、継続的なデータにより各技能の伸びを実感し、学習意欲を高める機会となっている。

「着目するのはスコアの高低よりも、前回のスコアからの伸びです。スコアが伸びた生徒は名前を発表し、学習の達成感を得られるようにしています」(鈴木先生)

### 情報処理的視点からの読解力の育成

## シャドーイングと速読で、大量の英文を読み取る力を育成

21年度大学入学共通テストの英語では、多くの生徒が、教師の想定を上回る好結果を出した。それは、日々の学習の成果であり、特に、英文の意味を理解することを重視するコンテツ・シャドーイングの実施が功を奏したと、同校は捉えている。

「単元ごとにコンテツ・シャドーイングを実施しました。語数の多い英文を何度も聞き、意味を理解しよ

うとする活動を通じて、多少意味が分からない箇所があっても、英文の概要を素早く捉えられる力が鍛えられたのでしよう。結果として、大学入学共通テストのリスニングとリーディングの問題の双方に効果があったと考えています」(堀校長)

週1回の帯学習で行っている速読も、英語力の育成に効果的だったと考えている。

「基本的な読解力を育成するため、WPMを意識しながら速読をさせています。そうした学習を通じて、大学入学共通テストで出題されたような複数のテキストから必要な情報を読み取り、整理・統合することが求められる問題への対応力が培われていったのだと思います」(宮下先生)

今後も、英語4技能を活用する実践の場を想定した言語活動を授業で展開していく考えだ。

「英語の習得に何より大事なのは、『習うより慣れよ』ではないでしょうか。これからも、生徒が日常的な場面を想定しながら英語を使う機会を授業の中で数多く設け、自身の世界を広げるツールとしての英語の力を高めていけるような支援をしていきます」(堀校長)

# 生徒が成長実感を持てる 指導と評価を追求し続ける

CANIDORリストやシラバスの開発に早くから取り組んできた福岡県立香住丘高校。先駆的な英語教育で地域の信頼を得てきた同校は、生徒の英語力のさらなる向上を目指し、生徒が成長を実感できる指導と評価を模索し続けている。

## 生徒の現状

英語力向上に励む生徒の意欲を  
着実に高めていくために

福岡県立香住丘高校では、「聞く・読む・話す・書く」の4技能を統合し、「知識・理解」「関心・意欲・態度」などの4観点をバランスよく評価する授業をいち早く実践してきた。1985年に県内の公立高校として初めて英語コースが設置されて以来（94年に英語科に改組）、先進的な英語教育とカリキュラム開発に取り組んできた。2003年度のSELEHi研究指定以来、CANIDORリストの開発・研究に力を入れ、13年度から実施の現行学習指導要領で求め

られている「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」授業の実践のため、教科書をベースとした「観点別シラバス」の作成にも着手した。

その結果、地域の生徒、保護者からの同校の英語教育に対する評価は着実に高まったと、教育振興課長で2学年担任を務める木村雄一先生は語る。

「本校は、英語科だけでなく、数理コミュニケーションコースを含む普通科においても、中学生向けの説明会などで充実した英語教育を紹介しています。そのため、英語科、普通科を問わず、生徒は『高校では英語を頑張ろう』という思いを持って

入学してきていると思います」

さらに、近年の生徒は「話す」「書く」活動に対する抵抗感が少ないと木村先生は説明する。英語の授業が始まる前の休み時間のうちからペアやグループで言語活動を始める生徒も多く、英語の授業を心から楽しんでいる生徒が増えたと感じている。

ただ、生徒の多くは英語学習に対して意欲的であるが、入学段階での英語力については、多層化しているのが同校の現状だ。

「英語が決して得意とは言えない生徒も、周りの生徒の力を借りながら、意欲的に言語活動に取り組んでいます。そうした生徒の姿を見る度に、うれしく思う反面、英語科の教

師として、すべての生徒の英語力を着実に高め、生徒一人ひとりの希望進路の実現に全力を尽くそうと、気を引き締めています」（木村先生）

## 指導と評価の計画上の工夫

生徒が自身の成長を  
把握できる授業へ

そうした状況に向き合う中で近年、同校の英語指導では、一人ひとりの生徒が自分の成長をより詳細に把握できるよう働きかけを重視している。1学年英語科副担任で、普通科の英語の授業を多く担当する山本聡子先生は説明する。「パフォーマンスを評価する場合

**設立** 1984 (昭和59) 年  
**形態** 全日制/普通科(一般コース、数理コミュニケーションコース、英語科/共学)  
**生徒数** 1学年約400人  
**2021年度入試合格実績(現浪計)** 国公立大は、東京外国語大、大阪大、広島大、九州大、熊本大、国際教養大、神戸市外国語大などに183人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、早稲田大、同志社大、関西学院大などに延べ974人が合格。

**学校概要**



**山本聡子**  
 英語科副担任・1学年英語チーフ  
 やまもと・さとこ  
 教職歴14年。同校に赴任して6年目。英語科。



**木村雄一**  
 教育振興課長・2学年英語チーフ  
 きむら・ゆういち  
 教職歴14年。同校に赴任して10年目。英語科。



**吉武勲**  
 英語科教科主任  
 よしたけ・いきお  
 教職歴20年。同校に赴任して4年目。英語科。



**龍本未知湖**  
 英語学科主任  
 たきもと・みちこ  
 教職歴21年。同校に赴任して6年目。英語科。



**近藤圭太**  
 教務主任  
 こんどう・けいた  
 教職歴18年。同校に赴任して3年目。数学科。

は、複数回練習させた後で評価しています。1回目のチャレンジでの『できていない状態』を評価の対象にするのではなく、2回目、3回目のチャレンジで『できるようになった状態』をルーブリックに照らし合わせて評価することで、生徒に自身の成長を実感させることが、英語科全体の共通認識となつています。また、練習を前提にすることで、教師がルーブリックで設定する評価規準が高くて、生徒は『この状態まで成長できるはず』と、高い目標にも前向きに挑戦しようとしています」

パフォーマンス活動ごとにルーブリックを示すこと(図1)を徹底し、生徒の実態に寄り添った指導と評価を模索する中で、評価の仕組みの改良の必要性を感じていると、英語学科主任の龍本未知湖先生は言う。

「英語科の生徒たちは、CAN DOオリストの記述を強く意識し、『できるよになろう』と学習に臨みますが、英語力が多様な普通科には、CAN DOオリストを自身の到達度の把握のツールとして活用できていない生徒もいることに気づきました。本校の普通科の生徒は真面目に学習にも取り組み、自己評価は厳し

図1 ルーブリックが示されている、パフォーマンステストのワークシート

WORKSHEET

Lesson 6 Stonehenge - The Facts and Mysteries

プレゼンテーションに挑戦しよう

1. Goal  
 ひとつの世界遺産について調べ、その世界遺産の魅力について発表する。

2. Schedule (Lessonの内容理解と同時に行っていきます)

Date	Activity
12/21 (月)	Introduction・テーマ決め・日本語原稿作成開始
1/7 ( )	日本語原稿作成(資料を行動して持ち寄り)
1/7 ( )	日本語原稿・英語原稿提出・ポスター作成開始
1/7 ( )	ポスター作成・英語原稿提出
1/7 ( )	ポスター提出・プレゼン練習
1/25 (月)	発表本番!

3. Choices of Subjects (World Heritage Sites)

- Great Barrier Reef (Australia)
- The Great Wall (China)
- Memphis and its Necropolis - the Pyramid Field from Giza to Dahshur (Egypt)
- Mont-Saint-Michel and its Bay (France)
- Piazza del Duomo, Pisa (Italy)
- Buddhist Monuments in the Horyu-ji Area (Japan)
- Mosi de Rapids (Chile)
- Historic Sanctuary of Machu Picchu (Peru)
- Stonehenge (UK)
- Grand Canyon National Park (USA)

4. 4 Topics to include in your presentation

- What is \_\_\_\_\_? (Outline of the World Heritage site)
- Why is \_\_\_\_\_ listed as the World Heritage Site?
- Mysteries of \_\_\_\_\_
- Problems \_\_\_\_\_ faces today

5. Rules

- 1グループ4名、4分の模造紙1枚を使ったポスター発表。
- 1人につき1トピックずつ発表し、全員が発表できるようにする。
- 原稿なしで発表する。ポスターには写真や絵、最低限の情報のみを記載する(文字は記載しない)。
- 発表本番では、「一番魅力的に感じたい世界遺産」に全員で投票し、1位のグループを決める。

6. Evaluation

Category	3	2	1
Voice Projection	loud enough easy to hear	if the audience is seated, they can hear	too quiet to hear
Pronunciation	good pronunciation	some mistakes (understandable)	hard to understand
Eye Contact	constant eye contact	sometimes forget	too shy to look at the audience
Preparedness and Organization (Materials)	well prepared and organized materials	somewhat prepared and organized materials the minimum information	does not have prepared for the presentation.
Preparedness and Organization (Cooperation)	prepared and organized as a group. Connects each topic into one presentation.	somewhat prepared and organized as a group. Sometimes connects each topic.	does not appear to have prepared for the presentation. Topics are unconnected.
<b>TOTAL</b>			/15

7. Group Member

Subject (World Heritage Site)	Group Member
	1 What is _____?
	2 Why is _____ listed as the World Heritage Site?
	3 Mysteries of _____
	4 Problems _____ faces today

リーダーにマーク

めです。そのため、CAN DOオリストの中の『できていない』という記述を、『完全にできていなければ

らない』と解釈する傾向があります。本校に勤務された先輩の先生方も、『CAN DOオリストがCAN NOT

パフォーマンステストや言語活動を行う度にルーブリックで自己評価することで、生徒は自身の英語力の向上を実感することができる。  
 ※学校資料をそのまま掲載。

図2 課末の言語活動概要

福岡県立香住丘高等学校 36期生 コミュニケーション英語II Perspective

<1年次>

課	目標	内容
Lesson 3	・料理関連の表現に慣れ親しむことができる。 ・SVOの英文を正しく作ることができる。	・料理関連の表現(動詞を中心に)をイラストと一致させるクイズを行う。 ・「ホストファミリーへ和食レシピを作って紹介する」という設定で、Guess What Quizをペアで互いに発表する。
Lesson 4	・生きた英語に慣れ親しむことができる。 ・英語プレゼンの基本技術(声の大きさ・アイコンタクト等)を習得する。	・英字新聞(New York Times)読解 ・オバマスピーチ視聴&ディクテーション ・Influential Japaneseのプレゼン原稿を作成し、Show & Tell形式でペアに発表する。
Lesson 5	・生きた英語に慣れ親しむことができる。 ・意見とその理由を論理的に説明できる。 ・英語での手紙の書き方を習得する。	・マクススピーチ視聴&ディクテーション ・the most impressive partについて、ペアで意見を交換する。 ・マラフへ実際に手紙を書き、送ってみる。
Lesson 6 Lesson 8 世界遺産 大会!	・プレゼンの基本的な構成を学ぶ。 ・ディスコースマーカーを上手に使用して、一貫してまとまりのある英文を作成することができる。 ・Visual Aidの効果的な使い方を習得する。	・世界遺産について各班で一つ選び調べ、調べた内容を原稿とポスターにまとめて提出&演習指導、リポートしたものをもとに、班で協力しながら英語で発表する。プレゼンの際には、話し手と聞き手の2グループに分け、聞き手が時計回りに話し手のブースを訪問するため、話し手は同じ発表を繰り返し行うことになる。このため、話し手は発表するたびに上達していく。

※学校資料をそのまま掲載。

ードリストとならないように、生徒の現状に合わせて修正していくことが大切」と言われていました。生徒の学習意欲を高めるといふ観点から、CAN-DOリストについて改めて検討する時期が来ていると感じています」

シラバスについても、「記述されている活動や目指す状態は、生徒にとって理解しやすいものだろうか」「教師のためのものになっているのではないか」といった声が英語科内で上がるようになった。とはいえず、生徒が目指すべき状態をパフォーマンス

ンステストごとのルーブリックで示すだけでなく、1年間を通して、どんな状態を目指すべきか、どのような学習の取り組み方を求めているのかを生徒に示すことも必要だ。

現在、英語科では、各レッスン末で取り組む言語活動の内容と目標について、「課末の言語活動概要」(図2)を用いて生徒に説明している。生徒は、活動の概要を把握し、レッスン末のパフォーマンステストを念頭に置くことで、「ここまでできるようになっておこう」と、目標を明確化して日々の授業に臨むことがで

図3 授業オリエンテーション

36期生 1学年英語 授業オリエンテーション

コミュニケーション英語1 (3単位)

使用教材 ①Perspective English Communication 1 教科書  
②Perspective English Communication 1 本文完成ノート  
③Perspective English Communication 1 生使用音声CD  
④新コメタン0 (黄色; 中卒修了~高校基礎レベル)  
⑤新コメタン1 (赤色; 大学合格必須レベル)

予習の仕方

1. 辞書を使わずに、本文を読む。
2. 本文完成ノートの右側の問題を解く。
3. 辞書を使いながら、もう一度本文を読み、フレーズごとに和訳する。
4. 本文完成ノートの右側の問題の答えを修正・完成させる。
5. 音声CDを利用して本文を聞き、音読する。

授業の準備方 ※基本的に授業は英語で実施。教科書P.8~9の表現を積極的に使ってみよう!

1. 単語テスト (新コメタン黄色からスタート)

授業最初の授業で実施。

- 1回目: UNIT 01~03, 100問 (英一日50問+日一英50問), 8割合格。
- 2回目: UNIT 04~06, 100問 (英一日50問+日一英50問), 8割合格。
- 3回目以降は、UNIT 07から50問ずつ進める。

20問 (英語を聞いてスベルと意味を書く)のうち、8割合格。

合格者の点数は英語係が記録し、授業後までに答案と記録表を担当者へ提出。不合格者は、やり直し5回ずつ許す。翌日昼休みまでに答案を担当者へ提出。

2. 教科書導入~新引出単語~本文リスニング (Lesson 3 Washokuからスタート)

速読問題 (ノート右側の英語英答)の答え合わせ

3. さらに細かい部分を開く英問英答  
日本語を交えた重要文法項目の説明  
精読問題 (ノート右側の残り)の答え合わせ

4. ペア活動 サイトラシートを使ってフレーズごとに英一日

5. 音読練習 Listen & Repeat / Overlapping / Shadowing
6. 各課の最後に表現活動 スピーチ・プレゼン・スキット

復習の仕方

1. 本文を音読し、内容を理解できているか確認する。
2. 音声CDを利用して本文を聞き、音読する。(覚えてしまつてもいい)

※定期考査直前は、教科書本文の音読テストを行う。  
※定期考査やGTEC直前は、Winstop等を使用し対策を行う。

英語表現1 (2単位)

使用教材 ①Revised Vision Quest English Expression 1 Advanced (音テキスト)  
②総合英語 Evergreen English Grammar 27 Lessons updated (録音テキスト)  
③総合英語 Evergreen English Grammar 27 Lessons Workbook updated (ワーク)  
④総合英語 Evergreen (参考書)

※学校資料をそのまま掲載。

きる。また、新たな試みとして、年度当初に「授業オリエンテーション」を配布し、各科目の予習・授業・復習の進め方、週末課題や長期休業中の課題の内容や取り組み方を生徒に伝えている(図3)。このように、「授業オリエンテーション」で年間を通して学習のポイントを、「課末の言語活動概要」で各レッスンの目標を、各授業で配布されるワークシートとルーブリックで具体的な活動の目標を示している。

「パフォーマンステストごとのルーブリックや『課末の言語活動概

要」によって、生徒は活動ごとに自分がどんな状態を目指しているのか、どのような規準で評価されるのかを具体的に理解できています。今後は、シラバスやCAN-DOリストを改定しながら、生徒により大きな評価規準を示していくことが求められていると思っています。目の前の一つひとつの授業を大切にしながら、生徒がどんな姿に成長するかを、今まで以上に明確に描くことが必要だと感じています」(瀧本先生)

外部アセスメントの役割

何ができるようになるのかをイメージさせる機会に

「何ができるようになるのか」をレッスンごと、または授業の言語活動ごとに伝えることで、自分は英語をどのように使えるようになるのか、イメージできると、生徒の学びに向かう姿勢は大きく変わると言う。

「2年次2学期の『英語表現』では、ディベートに取り組みます。ディベートに至るまでには、教師が出した意見に対して質問や反論をさせたり、教師の質問を予想させて英文で書かせたりと、スモールステップで多様な言語活動を組み込みます。そうした活動の意味と学期末の活動とがつながりをもってイメージできた生徒は、授業の帯活動である1分間スピーキングでWPM（\*1）が急増するなど、大きな成長を見せてくれます」（瀧本先生）

そうして日々の言語活動を積み重ねることによって自分は何ができるようになったのかを、生徒が具体的にイメージできるように、同校では「GTEC」を受検させている。「GTEC」のライティングは海

外で英語話者が採点していることを説明すると、生徒の意欲は明らかに高まります。海外を歩き来ることが難しい今だからこそ、どのような形であっても、外の世界とつながることを生徒は求めています。単に大学入試に役立つからといったこと

だけではなく、将来、どんなふうな社会で活躍したいのかを考える過程に、『GTEC』のようなアセスメントを位置づけ、生徒に受検することの意義と日々の学習とのつながりを語ることも、教師には求められていると思います」（木村先生）

さらに、英語科の生徒には、「エッセーライティングが得意であれば、大学や留学先で一目置かれる」「正しい文法を使いこなすことで、仕事でも信頼を勝ち得る」などと、英語を使って活躍している将来の自分がイメージされるような声かけも、日々の授業において行うようにしている。

今後の課題・展望

生徒の理解を深める

よりよい「問い」を追究

英語力を高めるための授業の実践を先駆的に進めてきた同校が、さら

なる授業改善のために取り組もうとしているのが、授業での「問い」の質の向上だ。同校の英語科では、教科書の内容を深く問う発問と、それに対して予想される生徒の答えを書き出した「シナリオ」（図4）を使用している。レッスンごとに作成担当の教師を決め、作成してきた本シナリオは、同校の英語科の授業の質の担保に大きく貢献していると、英語科教科主任の吉武勲先生は説明する。

「赴任したばかりの教師も、シナリオを見ることが、本校の生徒には授業中にどの程度のレベルの質問が

できるのかがすぐに分かります。シナリオは、英語科の教師全員で作り、批評し合いますが、そうした活動によって、本校の英語科には、指導について対等に語り合う風土が醸成されています。指導のベースとなるシナリオがあるからこそ、そのシナリオを生かして、さらにどんな深い問いが考えられるかを、もつと教科内で語り合っていきたいと思っています」

22年度に向けては、観点別学習状況の評価など、教科を超えて学校全体で語り合うべきテーマも多いため、常に新しい取り組みに挑み続けてきた英語科への期待が大きいと、教務主任の近藤圭太先生は語る。

「英語科の先生方からは、4技能5領域での観点別学習状況の評価の実践など、英語科ならではの検討課題があると聞いていますが、生徒本位の授業改善を続けてきた英語科の知見を基に、教科を超えて対話することが、本校全体の教育活動の改善につながると考えています」

図4 シナリオ

Part 3  
[Oral Introduction]

7. This is the last part of this lesson. So far, we have learned about a lot of important issues from the story of Khaled Reshad. Do you remember some of them? How he got interested in medicine and Japan? The story about the elderly couple who welcomed him into their home? The story of Afghanistan? The activities of the NGO helping people in Afghanistan? Every one of them is really important for understanding Reshad's story. In Part 4, we will see two important and symbolic things as we think about Reshad's medical activities. These two things are symbols of this entire lesson. So, reading this final part, please try to think about how they are associated with this lesson.

[1<sup>st</sup> paragraph]

1. What did Reshad's father express in his poem?  
- He expressed the importance of uniting the Afghan people.

2. In Reshad's father's poem, why did the king refuse to accept a pair of scissors?  
- Because he thought that scissors cut things, even people's minds.

3. What is needed to connect people?  
- Needles and thread are.

[2<sup>nd</sup> paragraph]

4. What does Reshad think is important today?  
- He thinks connecting people is.

5. Who does Reshad think needs help the most?  
- He thinks elderly people who have serious diseases and others who have had injuries do.

6. To reach those who need help the most, what has Reshad been doing for many years in Japan?  
- He has been making house calls.

7. What does Reshad believe is very important for medical professionals to do?  
- He believes it is very important for them to go to those who need help.

[3<sup>rd</sup> paragraph]

8. What is an important lesson that Reshad has learned from his house calls?  
- It is that doctors need to consider patients' lives as a whole when they examine them.

※学校資料をそのまま掲載。

\*1 Words Per Minute の略。1分間あたりに読める単語数のこと。

大分県教育庁 高校教育課

エビデンスを基に課題を把握し、

指導と評価の一体化の実現に向けて全校を支援

大分県教育庁高校教育課は、2021年度、文部科学省「令和元年度『英語教育実施状況調査』」の結果を踏まえて、「大分県英語教育改善プラン」の内容を大きく変更した。すべての県立高校で英語の運用力を測定する「大分県版英語4技能認定テスト」を実施し、その結果を指導と評価の一体化の実現に生かすべく、取り組みを進めている。

取り組みの背景

全国データとの比較から  
英語教育の課題が浮き彫りに

大分県教育庁高校教育課（以下、県教育庁）は、2014年度、「大分県グローバル人材育成推進プラン」を策定し、グローバルに活躍する資質・能力を持つ児童・生徒の育成に、全県を挙げて取り組んできた。児童・生徒の英語力の育成と、教師の英語指導力の向上に焦点をあて、16年度には、「大分県英語教育改善推進プラン」（以下、プラン）を策定。以降、英語教育に関する全国の動向と県の実情を踏まえて、年度ごとに改善プランを策定している。

21年度の策定にあたっては、文部科学省「令和元年度『英語教育実施状況調査』」の結果を基に、県の英語教育の状況を改めて分析した。すると、高校における「生徒の英語による言語活動時間の割合」は全国平均を上回っていた一方で、「パフォーマンステストの実施率、及び平均実施回数」「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の公表、及び達成状況の把握の状況」は、全国平均を下回っていた（図1）。グローバル人材育成推進班の佐野博紀指導主事兼課長補佐（総括）は、課題意識を次のように語る。

「全国平均との比較から、本県が指導と評価のうち、評価の面におい

て、さらに改善の必要がある実態が明らかになりました。全国平均を上回っていた生徒の言語活動時間についても、英語によるコミュニケーション能力を総合的に育成する言語活動を行うなどの一層の充実が求められます。そこで、授業改善に資する情報提供を積極的に行った上で、技能ごとに到達度を評価して、その結果を踏まえた授業改善を行うというサイクルを回す、指導と評価の一体化の実現を支援したいと考えました」

授業等の実践事例を共有し、  
目指す指導と評価をイメージ

調査結果の分析から顕在化した課

題と、新学習指導要領を踏まえて、プランでは次の3点を最重要課題に掲げた。

- ① 英語4技能の育成を図る授業改善
- ② 指導と評価の一体化を推進するパフォーマンステストの実施
- ③ 「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標の活用

その3つの課題を踏まえて、21年度のプランを策定した（図2）。その1つが、英語教育に関する先進的な実践事例の共有だ。県教育庁のウェブサイト「大分県教育庁チャンネル」で配信される公開授業の様子を撮影した動画や、県内の英語教師の共有フォルダに集められる指導・評価の実践事例を通じて、英語

4技能の育成のための授業や評価のあり方、目標設定や評価の方法などを学ぶという取り組みだ。

生徒が英語4技能を活用する言語活動と、生徒の学習改善につながる評価の事例、パフォーマンステストの実践を見て、新学習指導要領で求められている英語の指導と評価について理解を深めてもらい、指導観・評価観の転換を図るといふねらいがある。高校教育指導班の山本俊幸指導主事は、次のように語る。

「評価は本来、生徒の英語力を正確に把握し、さらに高めるために活用するものです。そして、先生方の指導の改善につながるものである必要があります。そのような評価の実



山本俊幸  
高校教育指導班  
指導主事  
やまもと としゆき

佐野博紀  
グローバル人材育成推進班  
指導主事兼課長補佐(総括)  
さの ひろのり

**大分県 概要**  
県立高校数 普通科18校、専門科11校、総合学科2校、普通科・専門科8校、専門科・総合学科2校  
県立高校生数 約2万人(全日制)

践に向けて、先生方が今求めているのは、理論や解説だけでなく、『具体的な実践事例』なのです」

**英語4技能の評価に向けて**

**普通科・専門科の枠を超え、4技能の育成の重要性を周知**

指導と評価の一体化に向けた施策として、21年度から「大分県版英語4技能認定テスト」(以下、認定テスト)を導入した。すべての県立高校の2年生が「GTEC」を受検し、

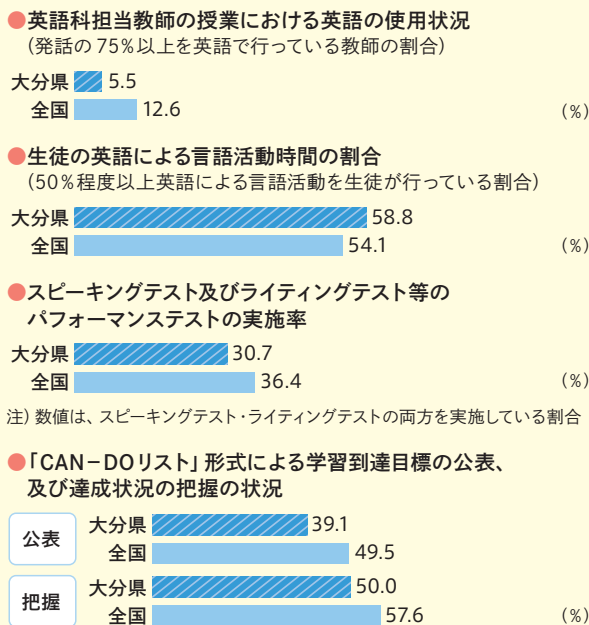
その結果から、各校が指導の成果や課題を把握し、授業改善を図ること、そして評価につながることをねらいとしている。

施策のポイントは、専門高校も含め、すべての県立高校を対象とした点だ。勤務校の学科を問わず、全教師が到達目標に基づく授業を行えるようにしたいという背景に基づいた施策であると、山本指導主事は語る。「これからの社会では、生涯にわたる様々な場面において英語を使うようになる」と予測され、未来の創り

手である生徒には、使える英語力、学び続ける力が求められます。高校教育においても、大学入試だけに目を向けるのではなく、すべての生徒の英語力を技能別に把握し、授業改善につながる仕組みが必要だと考えました。各校には、それぞれ校風や学科の特色があり、生徒の希望進路も様々です。そういった実情を踏まえて、これまでの研修等から一歩進んだ本施策が、生徒一人ひとりの英語力に還元されるものと期待しています。自校の生徒に卒業時まで

に身に

図1 英語教育に関する実施状況(高校)



注) 数値は、スピーキングテスト・ライティングテストの両方を実施している割合

※大分県教育庁資料を基に編集部で作成。

図2 2021年度「大分県英語教育改善推進プラン」概要

- 1 高校教育研究英語部会との連携** 研究チームを設置し、指導・評価に関する協議を通して、効果的な指導・評価のあり方を研究し、県内に普及する。
- 2 「大分県発英語授業モデル」の開発・普及** 地域や学校・学科等の特色に関連づけた4技能を高める授業例(他教科の学習内容を積極的に活用し、英語を用いて課題解決等を図る授業など)を実践・共有。
- 3 公開授業の実施** 英語教育推進リーダーや指導教諭が中心となり、英語4技能を育成する効果的な指導を実践している授業を公開。
- 4 情報発信・共有** 公開授業の様子を「大分県教育庁チャンネル」で動画配信。県内英語教員共有フォルダで指導・評価の実践を共有。
- 5 大分県版英語4技能認定テスト** 県立高校2年生を対象として、生徒の正確な英語力を測定するテストを実施。各校が設定する学習到達目標の達成に向けた授業改善のPDCAサイクルに活用する。各校の取り組みを支援するため、県は英語科主任等対象の全体研修会を年2回実施。

※大分県教育庁資料を基に編集部で作成。

につけさせたい英語力をイメージして、指導と評価を一体的に行えるよう、受検結果の活用を支援したいと考えました」

英語力を測定する意義を、佐野課長補佐はこう指摘する。

「観点別学習状況の評価や英語4技能の評価がどのようなものなのか、資料説明や実践事例の共有に加えて、実際に4技能を測るテストを受検することで、具体的にイメージでき、理解が深まると考えました」

### パフォーマンステストに 熱心に取り組む生徒たち

認定テストの実施後は、多くの学校から前向きな声が寄せられた。「GTEC」のスピーキングテストはタブレット端末に音声録音する形式だが、熱心に英語を話す生徒を見て、「本校の生徒が、こんなに英語を話そうとしている」「英語が苦手でも真剣に取り組んでいる」と、パフォーマンステストの実施を通じて、生徒の英語学習への意欲の高さに気づいた教師も少なくなかった。

「特に、英語の運用力を測る資格・検定試験を初めて実施した専門高校

の先生は、予想以上に頑張つて英語を使おうとする生徒の姿に心を打たれていたようです。パフォーマンステストに一生懸命取り組む生徒の姿を目のあたりにすることで、指導と評価の一体化に向けたパフォーマンステストのさらなる実施と、英語4技能の育成を図る授業改善が一層進むことを期待しています。また、パフォーマンステストに取り組み生徒の頑張りを認めることで、生徒に達成感を持たせてほしいと考えています」（佐野課長補佐）

県教育庁では、認定テストの結果を踏まえて、全県の教師を対象とした全体研修会を年2回実施し、新学習指導要領に基づいた指導・評価方法についての理解を深める予定だ(図3)。外部アセスメントを実施するだけでなく、その結果を教育活動の改善に生かす仕組みを構築することが、本施策の重要な目的である。

「英語の運用力を測るテストの問題がどのようなものであるかを、『GTEC』を通じて知り、テストの結果を基に校内で授業改善について話し合うことを通じて、将来的には、先生方自身が、英語の運用力を測る定期検査やパフォーマンステストの

問題を作成して実施し、指導と評価の一体化を図れるようにすることを目指しています」（山本指導主事）

### 教育委員会の役割

#### 現場のニーズに応じた 情報提供に努める

指導と評価の一体化に向けては、CANDORリストを活用した目標設定と達成状況の把握にも努める。

CANDORリストは、13年度にすべての県立高校が作成したが、現在の活用状況はP.20図1の通り課題があり、英語4技能の指導や評価に活用する意識を改めて喚起する必要があった。そこで、県教育庁は各校に、今回の認定テストの結果を基に、22年度の認定テストに向けた目標設定を求めるとともに、CEFRを踏まえたCANDORリストの見直しも進めてもらい、今後、各校のCANDORリストを取りまとめ、全県で共有する予定だ。

「文部科学省による英語教育実施状況調査では、英語力の到達目標をCEFRで示しています。認定テストの結果には、CEFRに基づいたスコアが示されるので、自校の生徒

図3 2021年度 認定テスト・全体研修会の流れ

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		認定テスト実施		結果返却 校内結果分析		第1回 全体研修会 (10月末) ・「CEFRに基づいた学習到達目標の設定」「目標→評価→指導を一体化させる指導方法・評価方法」をテーマとした外部講師による講演と演習	各校での実践 ・学習到達目標の見直し ・パフォーマンステストの実践			第2回 全体研修会 (1月末) ・英語4技能の育成に向けた指導と評価に関する実践発表(外部講師) ・評価・指導の実践事例の共有(学校種ごと)	各校での実践・検証 ・次年度の学習到達目標の設定 ・パフォーマンステストの実践及び検証

※大分県教育庁資料を基に編集部で作成。

の英語力がどのレベルにあり、目標とするレベルとの差がどのくらいなのかを把握することができると考えています」(佐野課長補佐)

22年度の新学習指導要領の実施の前に、県教育庁には、多くの高校からCAN-DOリストやパフォーマンステストの実施方法、観点別学習状況の評価などに関する相談が寄せられている。県教育庁は、それらの課題に関する情報提供や教員研修を行い、現場を支援していく。その際は、英語の運用力を測るための定期考査やパフォーマンステストの作問の仕方など、現場のニーズに応じた実用性の高い情報を提供する考えだ。

山本指導主事は、既に新学習指導要領が実施された小・中学校の英語教育の状況を踏まえ、高校の英語教育に次のような期待を寄せている。「小・中学校で培った英語力を総合的にさらに伸ばしていくことが、高校の英語教育の責務です。今後、県教育庁として、小・中学校で行われている授業の実態や、児童・生徒の状況等の情報を高校に周知し、小・中学校と高校とが連続性をもって子どもの英語力をさらに伸ばしていくよう、先生方を支援していきます」

## 本校の英語教育

### 前向きなコメントを活用し、 自分の強みに目を向けさせたい

大分県立日田林工高校

林業科、機械科、電気科、建築土木科を擁する本校には、希望進路が明確な生徒が多く、学習にも意欲的です。専門教科・科目の授業で協働作業や自分の意見が求められる機会が多いため、生徒は英語の授業でもグループワークに活発に取り組めます。教師やALTは、生徒が自分の考えを明確に、正確に伝えることで味わえる喜びや達成感を深く得られるように、文法や表現の正確性にも重点を置いて指導しています。

今回の認定テストでは、「情報がどれだけ伝わったか」の面でのよい評価が出たことで、生徒も教師も、日頃取り組んでいる学習や指導の成果を感じることができました。また、もう少しでCEFRのA2レベルに届きそうな生徒が大勢いることも分かりました。ライティングの答案に書かれていた採点者の英文のコメントを和訳する課題を出したところ、生徒は皆、熱心に取り組んでいました。課題である文法や語彙を強化しつつも、生徒の強みをしっかり評価することで、より主体的に学習に取り組む態度を育てるのではないかと期待しています。

そのためにも、指導と評価の一体化が重要であると思っています。県の人事交流で中学校に勤務した際、言語活動やパフォーマンステストを日常的に行う中学校の状況を知り、本校でも積極的に取り入れるようにしました。今後は、普段の授業内容を、平日や週末の課題、パフォーマンステストを含む単元テスト、定期考査に適切に反映し、より透明性のある指導と評価の一体化に努めていきたいと考えています。

【お話を聞いた先生/外国語(英語)科教諭 高山満也】

### 4技能別の客観的な数値が、 生徒の学習意欲を高める

大分県立別府翔青高校

本校は、グローバルコミュニケーション科(以下、GC科)、普通科、商業科があり、GC科では、以前から「GTEC」を全学年で年1回実施しています。普通科と商業科では、今回の認定テストで初めて4技能を測定しましたが、スピーキングテストで英語を一生懸命話す姿が見られるなど、生徒は前向きに取り組んでいました。

両学科では、昨年度から英語の授業で言語活動を強化しています。例えば、帯活動として、1人が絵の内容を英語で説明し、その内容を基にもう1人が絵を描き、説明したことを英文に書き起こすといったペアワークを行っています。また、自分の意見を書く英作文では、パラグラフの構成の仕方などを指導してきました。認定テストでは、そうして培ってきたスピーキングやライティングの力が初めて客観的に示され、それが想定以上によかったことに、生徒は日頃の学習の成果を実感できたようです。英語を苦手と言っていた生徒が、「次のテストに向けて、授業を頑張りたい」といった振り返りを書いたり、授業で意欲的に発言したりする姿が見られています。

授業でのペアワークやグループワークの様子を見ると、自分の好きなことや考えを伝える言語活動が英語学習の動機づけになっていると感じています。そうした意欲は、生涯英語を学習し続けることにもつながると考え、今後も言語活動を一層工夫していきたいと思っています。

【お話を聞いた先生/外国語(英語)科教諭 門脇早苗、小野俊子、宮崎ゆりえ】

(株)ベネッセコーポレーションからのお知らせ

## 高校で育成するべき英語力について考える 英語教育シンポジウムのご案内

高大連携の実証研究内容や、パネルディスカッションを通じて、  
高校・大学で育成していく英語力やその指導実践についてお伝えいたします。

**開催日時** 2021年11月27日(土) 14時～16時30分(2時間30分)

**内容** ① 立命館大学からの高大連携の実証研究発表

**講師** 立命館大学 教授 山中 司  
立命館大学 准教授 山下 美<sup>み</sup>朋<sup>ほ</sup>

② 高校・大学の先生方によるパネルディスカッション

**形式** オンライン(ライブ配信) ※お申し込みいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。

**参加申し込み方法** 右記の2次元コード、または下記 URL から登録してください。  
<https://sforce.co/3ixPgbf>

**参加申し込み締め切り** 2021年11月24日(水)

**参加費** 無料



※申し込み開始は11月1日(月)以降となりますので、1日以降にアクセスしてお申し込みください。

VIEWnextのLINEをご登録いただければ、  
VIEWn-expressやVIEWnextの電子ブックに、**ダイレクトにアクセス**できます!

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中!

VIEWnextや教育に関連する最新情報をタイムリーにお届けします。

友だち登録をすれば、冊子の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届きます。

\*友だち登録の方法は、右の2次元コードを読み取っていただくか、LINE アプリの

「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。



### お客様サービスセンター

フリーダイヤル **0120-350455** [受付時間] 月～金8:00～18:00/土8:00～17:00(祝日・年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17

発行日 2021年10月15日発行 発行人 山河健二 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション 学校カンパニー VIEW next 編集部

〒163-0415 東京都新宿区西新宿 2-1-1 新宿三井ビルディング 印刷製本/(株)協同プレス 編集協力/(有)ペンダコ 執筆協力/中丸 満、二宮良太

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。©Benesse Corporation 2021